

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査 小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目 次

1 はじめに

2 調査の概要

- (1) 調査の目的
- (2) 調査の方式
- (3) 調査の実施日および調査の対象
- (4) 調査の内容
- (5) 調査結果の見方
- (6) 本市の基本的な考え

3 各教科の平均正答率

- (1) 平成 31 年度（令和元年度） 各教科の平均正答率一覧

4 調査結果のポイント

- (1) 主な成果について
- (2) 主な課題について
- (3) 学力と相関のある質問紙調査について

1 はじめに

平成 31 年 4 月に実施された「平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。本市の調査結果及び課題等を公表することにより、学校・家庭・地域がより一層の連携し、本調査から見える児童生徒の学力や学習状況の改善に努めていきたいと考えています。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮して取り扱う必要があります。従って、本内容をご活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の方式

悉皆調査

参考	年度	調査方式	調査科目
	平成 19～21 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	平成 22 年度	抽出調査	国語、算数・数学
	平成 24 年度	抽出調査	国語、算数・数学、理科
	平成 25・26 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	平成 27 年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	平成 28・29 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	平成 30 年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	平成 31 年度（令和元年度）	悉皆調査	国語、算数・数学、 英語（中学校のみ）

※ 平成 23 年度は東日本大震災のため予定していた抽出調査を中止

※ 理科は 3 年に 1 度の実施

※ 平成 31 年度（令和元年度）より、英語（中学校のみ）は
3 年に 1 度の実施

(3) 調査の実施日および調査の対象

平成 31 年 4 月 18 日（木）

- ・ 小学校第 6 学年（市内 25 校、約 1,500 名）
- ・ 中学校第 3 学年（市内 11 校、約 1,500 名）

(4) 調査の内容

① 教科に関する調査

- ・ 小学校・・・国語、算数
- ・ 中学校・・・国語、数学、英語（「話すこと」については抽出校のみ実施）

② 質問紙調査

- ・ 児童生徒に対する調査
- ・ 学校に対する調査

(5) 調査結果の見方

本調査の結果で示されている平均正答率については、文部科学省の考え方に準じて整理している。

なお、平成30年度までの「全国学力・学習状況調査 報告書」(国立教育政策研究所)では「平均正答率の±5%の範囲内にあり、大きな差は見られない」とされていたが、今年度は同報告書において「平均正答率の±10%」と範囲が広がっていることから、小田原市では、昨年度までの「平均正答率の±5%」、今年度の「平均正答率の±10%」をそれぞれ目安としながら調査結果を整理した。

(参考)

各都道府県・指定都市(公立)の状況については、平均正答率を見ると、全ての都道府県・指定都市が**平均正答率の±10%の範囲内にあり、大きな差は見られない。**

出典:「平成31年度(令和元年度)全国学力・学習状況調査 報告書」

(令和元年7月 文部科学省 国立教育政策研究所)

(6) 本市の基本的な考え

小田原市教育委員会では、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標・内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、児童生徒の学力の一側面を示す客観的な資料である。

3 各教科の平均正答率

(1) 平成31年度(令和元年度) 各教科の平均正答率一覧(単位は%)

	教科	小田原市	神奈川県	全国
小学校	国語	56	61	63.8
	算数	63	67	66.6
中学校	国語	71	73	72.8
	数学	57	59	59.8
	英語	55	59	56.0

※市や県の正答率は整数表示

○小学校国語は全国平均正答率を5ポイント以上下回っているが、小学校国語を除く教科は「全国平均正答率±5%」の範囲内にある。なお、「全国平均正答率±10%」の範囲内には、全教科が含まれている。

新指導要領で育成を目指す三つの資質・能力(「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性等」)は相互に関連し合いながら育成されることから、今年度、国語、算数・数学ともにA問題(主として「知識」に関する問題)、B問題(主として「活用」に関する問題)といった区分が見直され、一体的に調査問題が構成された。小学校国語以外の平均正答率の全国との差は、前年までのA Bの平均とほぼ変わっていない。小学校国語は前年までのA Bよりも全国との差が大きくなっている。また、中学校では英語が初めて実施され、全国と同程度の結果となった。今後も小・中学校ともに基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと身につけていくことが大切である。

4 調査結果のポイント

(1) 主な成果について

【成果1】 小学校算数の知識・技能の定着が改善

○昨年度の調査において、小田原市の【課題2】として、「算数・数学の知識・技能の定着」を挙げている。今回の調査では、A（主として「知識」に関する問題）、B（主として「活用」に関する問題）という区分がなくなり、一体的に調査問題が構成された。しかし、過年度からの継続的な分析に資するため、「参考」として従来の区分が示されている。

小学校算数の全国平均との差は、従来の区分Aにあたる問題では、-3.5%と、昨年度よりも1ポイント差が縮まっている。

中学校数学においては従来の区分Aにあたる問題では-3.2%と、昨年度より0.1ポイント差が大きくなっている。

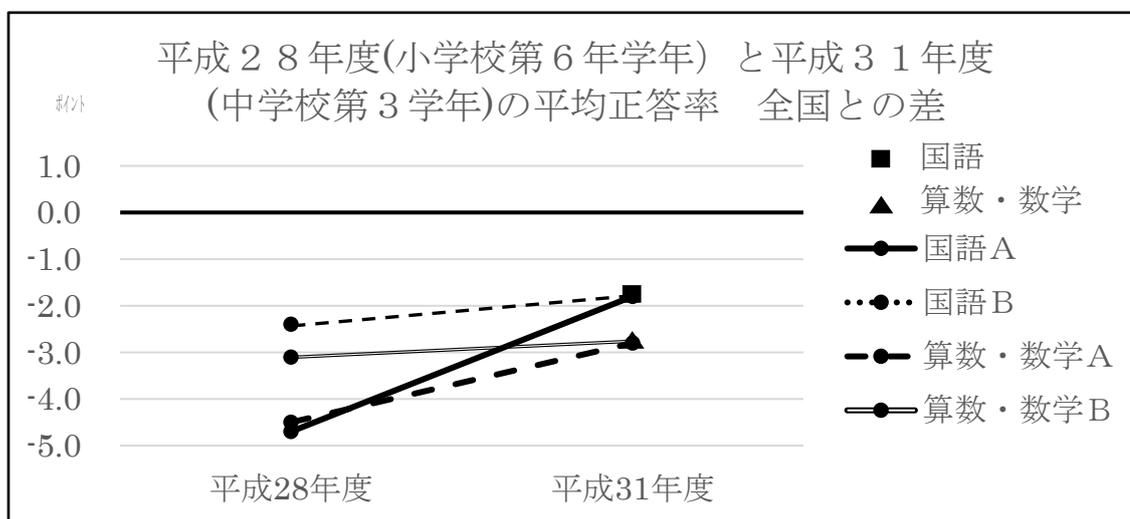
※小学校算数の問題番号1（1）（2）、2（1）（2）（4）、3（4）

中学校数学の問題番号1、2、3、4、5、7（1）（2）、8（1）

は従来区分では「活用」に関する問題とともに「知識」に関する問題にもなっている。

小学校算数において従来のA問題にあたる問題で平均正答率との差が縮まった。各学校では、自校の全国学力・学習状況調査の分析をもとに、本市の学力向上の重点目標である「基礎学力の向上」に向けた取組が行われている。家庭学習や朝の時間、また、授業の始めの時間などに、課題に計画的・継続的に取り組むなど、指導の工夫・改善の成果が現れている。

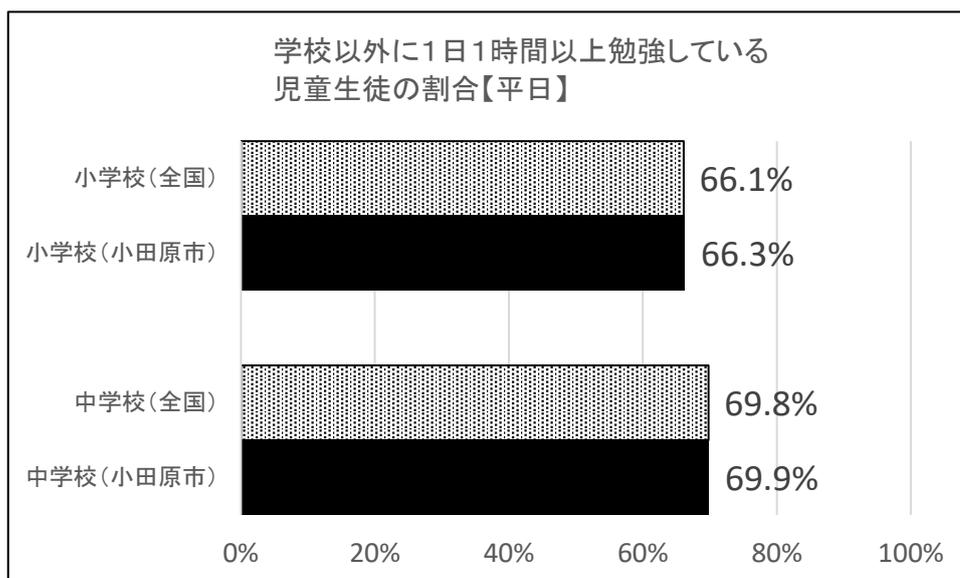
【成果2】 平成31年度（令和元年度）の中学3年生は、3年間で平均正答率が向上



○平成31年度の中学校3年生の結果を、平成28年度の小学校6年生の結果と比較し、同じ集団の3年後の変化を見ると、全国平均との差が-2ポイント~-5ポイントあったものが、国語・数学ともに差が縮まっている。

今年度まで4年連続で中学3年生において平均正答率の向上が見られた。今年度も、各学校で行っている指導方法等に関する研究や各中学校区を単位に行っている小中合同の研究会での取組の積み重ねが成果として現れている。

【成果3】 家庭学習の時間が継続して改善



- 「学校以外に1日1時間以上勉強している児童生徒の割合」では、小学校では昨年
から3.1ポイント増加し、**悉皆調査が再開された平成25年度以降、初めて小学校・中
学校ともに全国平均を上回った。**平成25年度と比較すると、小学校では12.6ポイン
ト、中学校では1.8ポイント増加している。

本市の課題でもあった、「家庭学習の時間」に継続して改善がみられている。各学校
での取り組みが結果として現れている。家庭学習の定着は児童・生徒の学力向上につ
ながることと考える。今後も家庭への啓発に努めていきたい。



(2) 主な課題について

【課題 1】国語の漢字の定着・言語の力

【小学校 国語】(数値は平均正答率、単位は%)

設 問	小田原市	全 国
【文の中で漢字を使う】 「調査の <u>たいしょう</u> 」	21.6	41.9
【文の中で漢字を使う】 「友達に <u>かぎらず</u> 」	57.9	69.4
【文の中で漢字を使う】 「 <u>かんしん</u> をもってもらいたい」	33.3	35.6
平 均	37.6	49.0

※中学校では今年度漢字を書く問題は出題されていない。

○小学校において、漢字を文の中で正しく使ったり、文脈に即して漢字を正しく書いたりすることについて全国平均を下回っており、特に同音異義語の正答率が低い。

設 問	小田原市	全 国
ことわざの使い方の例として、【ノートの一部】の <input type="text" value="ウ"/> に入る適切なものを選択する (習うより慣れよ)	60.9	73.0

○小学校において、ことわざの意味を理解して、自分の表現に用いることについて、全国平均を下回っている。

【中学校 国語】(数値は平均正答率、単位は%)

設 問	小田原市	全 国
「インターネット」のことを「ネット」というなど、語の一部を省いた表現についての説明として適切なものを選ぶ	74.9	78.7

○中学校では、語の一部を省いた表現について、場面や状況に応じた適切な活用の仕方を考えることについて全国平均を下回っている。

漢字に関しては、昨年度までと同様「漢字を書き、文や文章の中で使うこと」に課題が見られた。漢字は日常生活の中で適切に使うことができるようにすることが大切であり、ノートに何度も書くだけでなく、漢字の意味をしっかりと理解したり、前後に用いられている言葉や文脈に合った漢字を書いたりするなどの学習の積み重ねが必要である。特に同音異義語については漢字辞典を使って意味を調べたり、同音異義語を使い分けた短文作りをしたりする学習などを取り入れていくとよい。

ことわざの習得についても、調べ学習や読書をとおしてふれる機会を増やしていくとともに、日常生活の中で進んで使っていくことが大切である。

語感を磨き語彙を豊かにし、多様な語句を適切に活用するためには、それぞれの語句が文章の中でどのように使用されているかや、自分が表現するときどのように用いればよいかについて考えることが大切である。また、読書に親しみ、内容の全体を捉えながら、自分の感想や考えをもち、それらを文章で表現することも有効である。

【課題2】 小学校国語の話すこと聞くこと

【小学校 国語】(数値は平均正答率、単位は%)

設 問	小田原市	全 国
豊職人への【インタビューの様子】の「ア」に入る、自分の理解が正しいかを確認する質問として適切なものを選択する	72.7	81.3
豊職人への【インタビューの様子】の場面における、質問の工夫として適切なものを選択する	58.5	67.4
【インタビューの様子】の「イ」に、豊職人の仕事への思いや考えに着目して心に残ったことを書く	52.6	68.2
平 均	61.3	72.3

○小学校国語の問題3設問一、二、三は、「必要な情報を得るために、話し手の意図を捉えながら聞いたり、自分の考えをまとめたりすることができるかどうか」を見る問題となっている。それぞれの設問で全国正答率と8～15ポイントほどの差がある。

話し手の意図を捉えながら聞き、話の展開に沿って自分の理解を確認するための質問をしたり、目的に応じて質問の工夫をしたり、自分の考えをまとめたりすることに課題がある。

小学校国語の「話すこと・聞くこと」に課題が見られた。学習活動としてインタビューする場面だけでなく、普段の話し合いでも相手の意図を考えながら聞いたり、自分の考えをもったりすることを意識して活動していくことが必要である。国語だけではなく、他の教科での指導においても大切にしていかなければならない。

【課題3】 算数・数学の数量関係・関数

【小学校 算数】(数値は平均正答率、単位は%)

設 問	小田原市	全 国
洗顔と歯みがきで使う水の量を求めるために、 $6 + 0.5 \times 2$ を計算する	72.7	81.3
残り7ポール分進むのにかかる時間の求め方と答えを記述し、24分間以内にレジに着くことができるかどうかを判断する	55.9	62.6

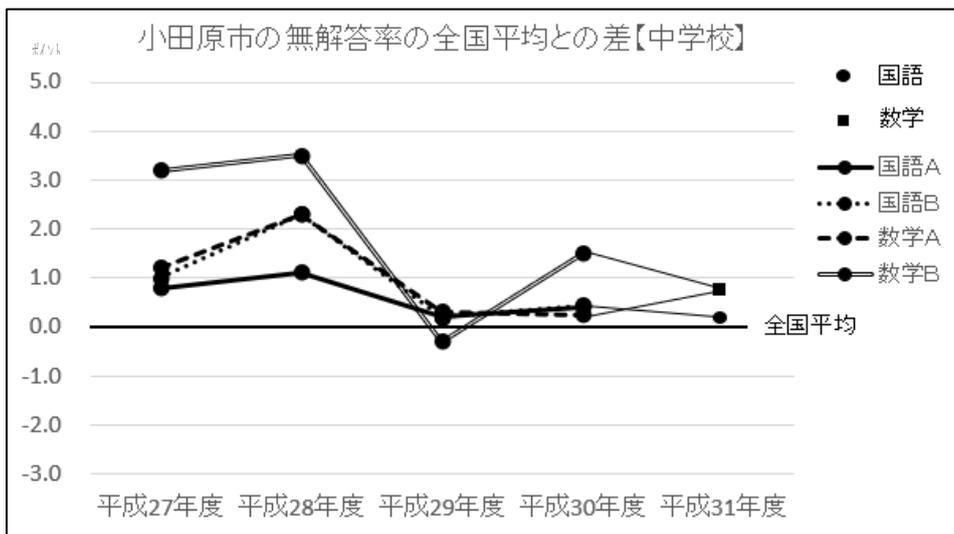
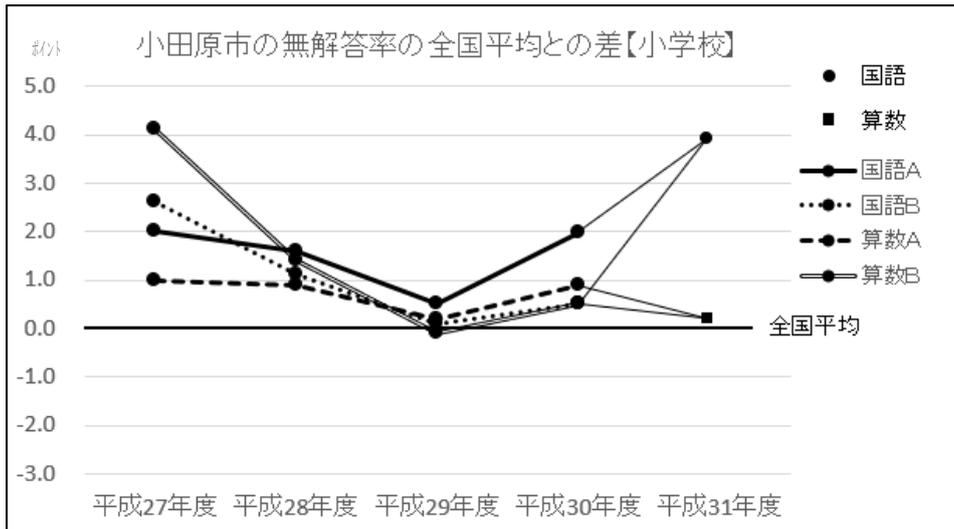
【中学校 数学】(数値は平均正答率、単位は%)

設 問	小田原市	全 国
反比例の表から式を求める	42.2	48.9

○小学校算数の「数量関係」、中学校の数学の「関数」では、全国平均正答率を6ポイント以上回っている問題がある。小学校においては加法と乗法の混合した整数と小数の計算をすること、場面の状況から、単位量当たりの大きさを基に、求め方と答えを記述し、その結果から判断することに課題がある。中学校においては反比例の表から、 x と y の関係を式で表すことに課題がある。

小学校算数の「数量関係」・中学校数学の「関数」に課題が見られる。数量関係の指導においては知識を暗記するだけではなく、具体的な場面と関連付けながら確実に理解できるようにすることが重要である。関数の指導では表と式を関連付ける活動を取り入れ、反比例における比例定数や対応の特徴を捉え、 x と y の関係を式で表すことができるように指導することが大切である。

【課題4】無解答率が高い



○小中学校とも、全ての教科で無解答率が、全国平均を上回っており、特に小学校国語では全国平均よりも4ポイント上回った。

本市の重点項目として取り組んでいる無解答率については、小中学校とも全ての教科で全国平均よりも高い状況が続いている。特に今年度は小学校国語で全国平均との差が広がった。

全国平均と同様に、自分の考え等を記述する問題の無解答率が特に高い傾向にある。設問にあるようなまとまりのある文章や複数の資料等を、一定の時間の中で正しく読み取り、問題の意味を正確に捉える力をつけていくことが大切である。

そして、様々な文章や資料等を参考にしたり、引用したりしながら自分の考えを論理的に文章で表現する力をつけていかなければならない。

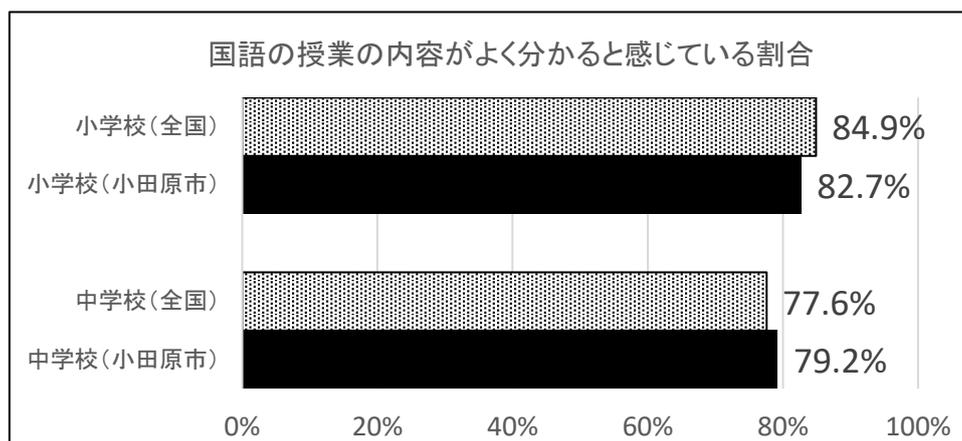
日々の生活や学習の様々な場面において、最後まであきらめることなく、粘り強く課題に取り組むことや、自分なりの考えをもつことの大切さを伝えていくことも重要である。

(3) 学力と相関のある質問紙調査について

クロス集計により教科に関する調査と相関関係のあることがわかっている質問紙調査の項目について、その一部を全国の状況と比べながら分析した。これらの項目に肯定的な回答をした児童生徒を増やしていくことで、教科の結果も向上していくと考えられる。

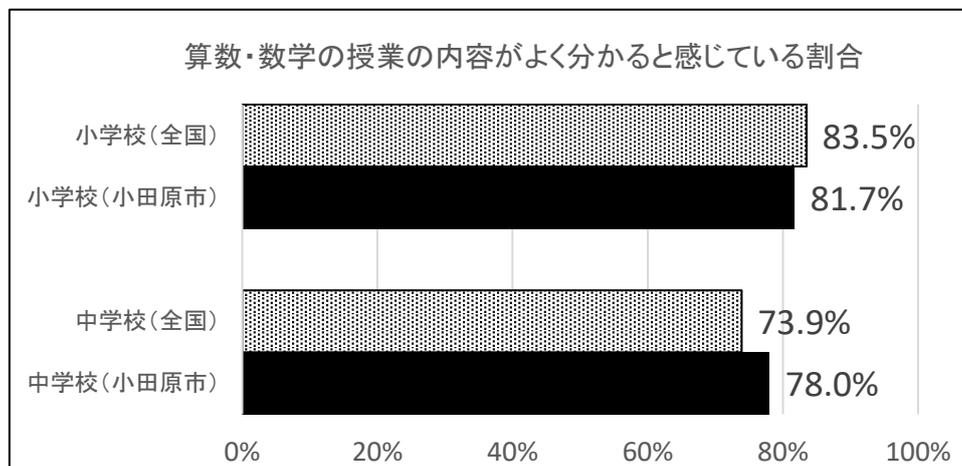
【相関 1】「国語の授業内容がよくわかる」

○小学校、中学校ともに「国語の授業内容はよく分かりますか」という設問で「当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合



【相関 2】「算数・数学の授業内容がよくわかる」

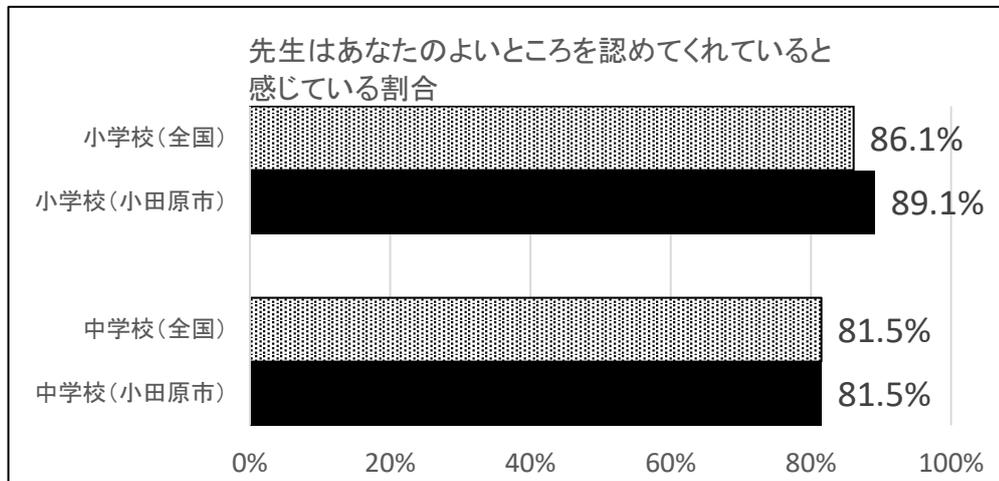
○小学校、中学校ともに「算数・数学の授業内容はよく分かりますか」という設問で「当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合



国語、算数・数学ともに、授業の内容がよく分かるという回答した割合は、小学校では全国平均を下回り、中学校では全国平均を上回った。児童・生徒が自分の理解を確かめながら学習を進めていくことは、学習内容の定着にもつながっていく。授業の中で学習活動の見直しをもつ時間や、振り返りの時間を設けるなど、児童・生徒が主体的に学ぶことができるようにすることが大切である。

【相関3】「先生は自分のよいところを認めてくれている」

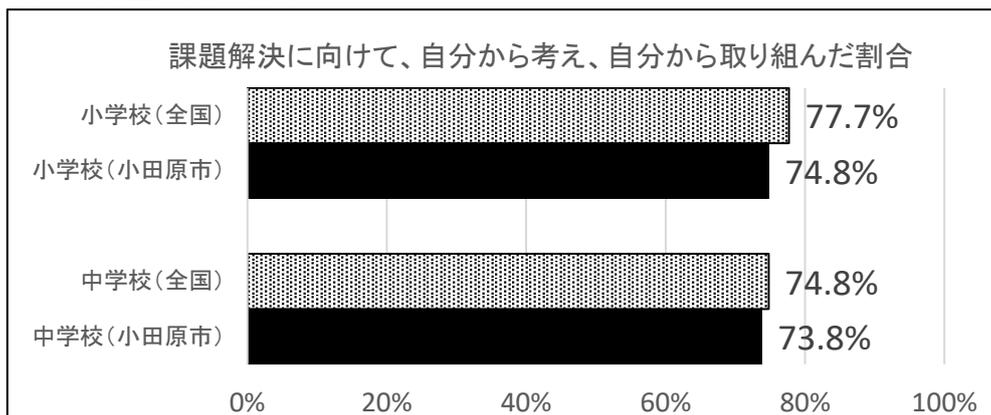
○小学校、中学校ともに「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という設問で「当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合



本市では、「先生はあなたのよいところを認めてくれている」において、肯定的な回答をした割合が小学校では全国平均を上回り、中学校でも同じ割合となっており、児童生徒と教員の関係はおおむね良好であるといえる。また、児童生徒に対する肯定的な働きかけは、学びに向かう力を育み学力の向上に繋がると考える。今後も教員が児童生徒一人ひとりのもつよさに目を向け、きめ細かな指導に努めていくことが大切である。

【相関4】「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

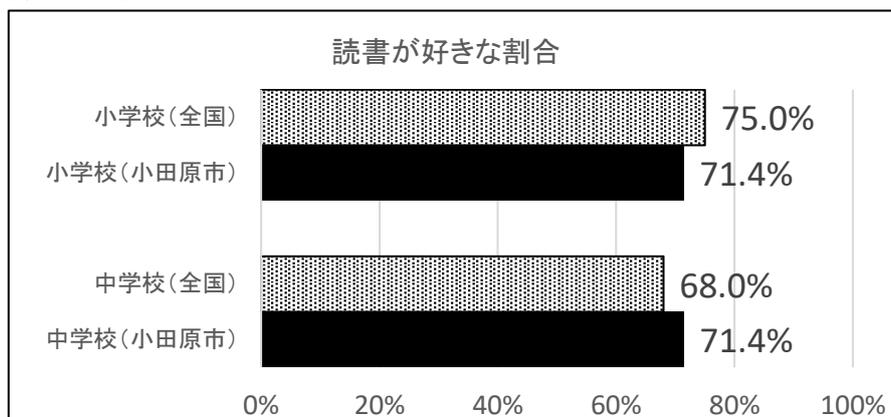
○小学校、中学校ともに「前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいたと思いますか」という設問で「当てはまる」と肯定的な回答した児童生徒の割合



課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童生徒の割合は全国平均をやや下回る結果であった。自分の考えをもち、主体的に課題に取り組むことはたいへん重要である。今後も、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、児童生徒一人ひとりが自ら問いを見出し、その解決に向けて知識や技能を活用し、学びを深めることを大切にしたい質の高い授業を目指していくことが大切である。

【相関5】「読書が好き」

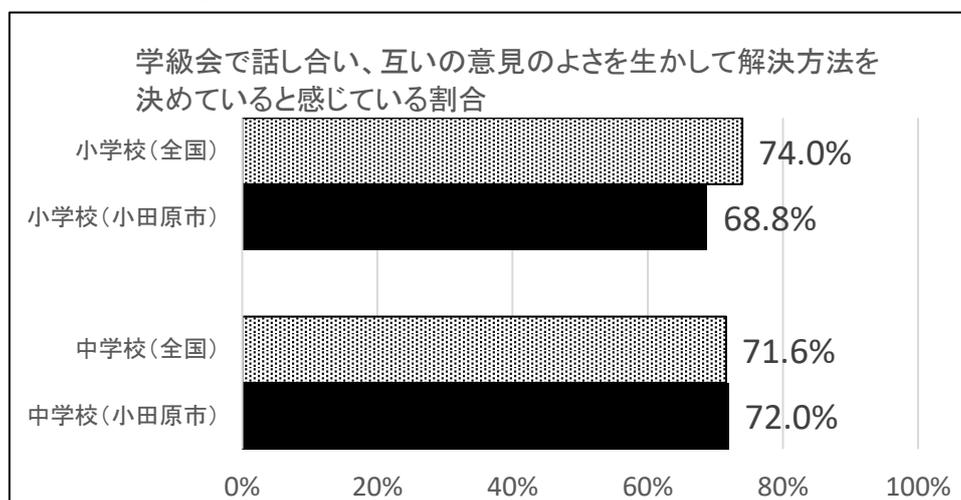
○小学校、中学校ともに「読書は好きですか」という設問で「当てはまる」と回答した児童生徒の割合



読書が好きという児童生徒の割合は小学校では全国平均を下回り、中学校では上回る結果だった。日常的に本に親しむことは、国語の力のもとになるとともに、様々な世界や考え方に触れることにもなる。児童生徒が進んで本に親しんでいくよう、環境を整えたり、支援をしたりしていくことが重要である。

【相関6】「学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めている」

○小学校、中学校ともに「あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると思いますか」という設問で「当てはまる」と回答した児童生徒の割合



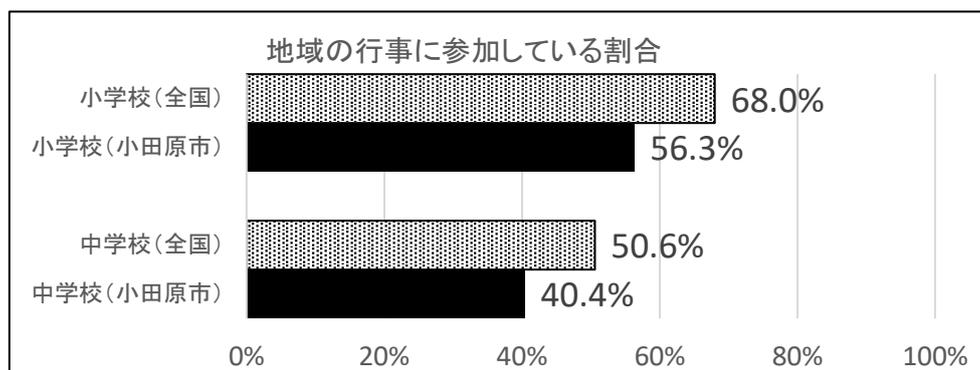
学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていると感じている児童生徒の割合は、小学校では全国平均を下回り、中学校では上回る結果だった。

「互いのよさを生かして解決方法を決める」話し合いを行うことは、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善につながる。

また、適切な学級集団作りをすることで、人間関係をどう形成していくか学んだり、社会参画の態度を養ったりすることにもなる。児童生徒が互いに認め合い、温かい雰囲気の中で話し合いができるようにすることも大切である。

【相関7】「地域の行事に参加している」

○小学校、中学校ともに「今住んでいる地域の行事に参加していますか」という設問で「当てはまる」と回答した児童生徒の割合



地域行事に参加している児童生徒の割合は全国平均を下回る結果だった。社会的事象に対する興味・関心をもったり、地域の人や、もの、ことと繋がったりするなど、地域や社会との関わりと学力には相関が見られる。これからのグローバルな社会で多くの人と関わり活躍していくためには、まずは、身近な地域で様々な人々と主体的に関わりあう経験が必要である。そのためにも、児童生徒を取り巻く学校・家庭・地域が、それぞれの立場で教育環境を整え、児童生徒の育ちを支えていくことが大切である。

